

宮脇 檀  
旅の手帖

宮脇 彩 編



没後10年。  
建築家・  
宮脇檀が  
旅先で測り、  
描いた  
最後の手帖。

建築家という職業からか、家が絵描きであって子どもの頃から絵を描く習慣があったからか、好奇心が強くてすぐ記録する癖があるからか、いや単に貧乏性であいている時間には手を動かしていないと不安になるからなのか。とにかく旅に行けば何か描きものをしている。ホテルの部屋を実測する、その町の地図を作って夜の探訪に備える、朝早く目が覚めてしまったときや雨の日に仕方なく窓外の風景をスケッチするなどなど。

そのために、旅行用のショルダーバッグの中にはカメラのほかには必ず入っているのがビニール表紙のスケッチブックと、それに描き込むためのひと握り分はある筆記用具類である。

実測するときなどの下描き用の薄い鉛筆やシャープ、スケッチ用の4Bの太いホルダー、アンダーライン用の赤鉛筆や赤や青のボールペン、地図に印をつけるためのマーカー類が2色、(地図の印刷の色によって2色を使い分ける)、0.2ミリや0.5ミリなど太さを変えた使い慣れた製図用のペンが何本か、サインペン、色鉛筆の短いのが1、2本、これでスケッチすると一見プロの絵描き風に見える筆ペンなど。昔は、色付け用のパステルまで入っていたけれど、ゆっくりスケッチなどしている時間など無くなってしまって今は入っていない。絵を描くというよりは、記録する……的なニュアンスが強くなったからでもある。

実測するときのためのコンベックス(巻き尺)や、消しゴムなども含めて、ショルダーの中の小ポケットの中からこれらを手探りで誤らず選び出し、もう一方の手でスケッチブックを開きながら書き始めるなどという特技がいつの間にか身に付いてしまった。

3センチほどの厚さになってしまったこのスケッチブックの3年分溜まった記録を暇な時に引っ張り出して眺めていると、それを書いたときの興奮や白けの状況が思い返されてもう一度旅の雰囲気が味わえるのがよい。

宮脇 檀

宮脇檀『度々の旅』PHP研究所、1993年、65頁

スケッチ=宮脇 檀  
ブックデザイン=有山達也+岩淵恵子

本書では、建築家・宮脇檀が生前、  
旅に持参していた手帖のうち  
最後に残された3冊の大半を紹介する。  
原則的に手帖の頁順を守り、  
50分の1で描かれた実測図は原寸で収録。  
さらに、これら実測図やスケッチに  
関連すると思われる宮脇檀の文章を引用した。

	はじめに	
6	父の旅	宮脇 彩
11	No.1	1993.06.25-1994.05.13
65	No.2	1994.05.16-1995.08.19
111	No.3	1995.09.19-1998.05.16
	コラム	
195	建築物のなごりの石や土たち	宮脇 檀
198	宮脇檀の実測したホテル(本書掲載分)	

## 父の旅

宮脇 彩

父との旅は、出発前から忙しい。

行き先が決まれば、まずは資料集め。家やオフィスの本棚を一巡し、行き先に関する参考文献を、地図やガイドブックに始まって建築や歴史書、そして旅先が舞台になっている小説に至るまで手当たり次第かき集め、足りないようなら書店へひとつ走り。みるみるうちに部屋の片隅にちょっとした本の小山が出来る。

建築関連の視察旅行の際は、それらをもとに街や建築物の概要が分かるよう図解などが入った配布用の資料を作る。父娘2人暮らしの我が家、父が視察団の団長だったりするとしばらくひとりで家に残されることになり、それもかわいそうだからと私を同行させてくれることもあるが、そんな時は「連れてってやるんだから、オマエモチツダエ」と私もこの資料作りに駆り出される。朝から晩まで建築ばかり見ているのも退屈そうだなあ、と途中で脱走を目論んでいる私としては、雑誌やガイドブックで見つけた近辺のブティックや小物屋さんを地図に落とし込む作業の方がずっと身が入るのだけれど。

出発前はそれら資料にどっぷり浸かりイメージトレーニングである。たとえばイスタンブールに行くなら、『コンスタンティノーブルの陥落』などを読み返す。がぜん旅気分が盛り上がるると同時に現地での解説もなめらかならうというものだ。金角湾を前にして、講談師よろしく見ていたかのようにひとくさり。

「ビザンチン軍はここに鎖を張ってオスマン軍の船団を防ごうとしたのでありますね。ところがどっこいスルタンは……」  
とスラスラと。父の鼻歌にイエニチェリ軍団の軍樂が交ざるようになれば準備万端だ。

慣れているので旅支度は手早いもの。使い込んだいつもの鞆にポイポイ

ポイと必要なものを放り込んでいく。資料に着替えに胃腸薬、一眼レフに大量のリバーサルフィルムと交換用の電池、そして忘れちゃいけないコンベックスと手帖。

現地に着きホテルにチェックインしても、やれひと休みとはいかない。ボーイさんが部屋に荷物を運んでくる間に部屋の実測をするのだ。ここで先ほどのコンベックスと手帖の出番である。ちょっとベッドでごろり、と思っていた私にもわか助手を仰せつかり、コンベックスの端を押さえたり、測った数値をメモしたり。父は慣れた手順であっちを測り、こっちを測り、サササッと簡単な実測図におこしていく。描きあがった頃合を見計らったかのようにコンコンコンとノックがあり荷物が運ばれてくるというのがいつものパターン。この間、10分ほどだろうか。

ホテルとあらば国内外問わず、高級リゾートから出張先のビジネスホテルまで貴賤の別なくかたっぱしから記録していく。全て50分の1の縮尺に統一しているので、手帖をめくっていると部屋の大小も一目瞭然。たいていは片面で収まるのだけれど、思わぬアップグレードのおかげで泊まることのできた香港・ペニンシュラのスイートは見開きいっぱい使ってもはみ出てしまい「ウチより広いや」と親子でため息交じりに笑いあったものだった。

なぜ実測するのかと、一度父に尋ねたことがある。

「自分の手で測って描くことで色々なことが伝わってくるのだ」

というのが父の答。ドアの開き方、ベッドや家具の配置、バスタブの大きさ、時計の向きなど、ディテールからは設計者の意図やそのレベルが、間取りの取り方からは時代やホテルのクラス、コアターゲットになる層、そして経営方針まで見えてくるのだという。

「旅の全てが勉強になるし、全てが面白い」

そう語る父は、人が暮らす場所のあれやこれやを、清濁全てひっくるめて面白がる観察者の目をしていて。

手帖をめくると、実測図の合間に旅先でのスケッチもちらほら。時差だけで目が覚めてしまい、散歩に出掛けた時の早朝の空。思いがけない大雨

でホテルに足止めされ、手遊びに描いた窓の外の景色。ショッピングの合間に、広場に面したカフェから眺めた夕暮れの景色と行き交う人々の姿。じっくりと時間をとり、丁寧に描き込んだ建築物のディテール等々……。こんなところからも旅先で一瞬とて無駄にしない様子がうかがえる。この辺が「宮脇は止まったら死んでしまう高速回遊魚のようだ」と揶揄された所以であろうか。

移動中も高速回遊魚は止まらない。バスに乗れば一番眺めのよい一番前の席に陣取り、走行中の車窓から珍しいものや美しい景色をみとめてはカメラを向ける。なにしろ移動中は「寝るな・食べるな・本読むな」がモットーの人なのだ。まわりにもそれを望むのが困ったもので、家族でのドライブ中でさえ同じ調子、私や弟が外の景色を見ていないとよく叱られたものだった。ちゃんと注意して風景を見ているか確かめるために車内でクイズを装ったチェックまで入ったりするのだ。たとえば皇居周辺を通れば必ず、

「ハイ、左の建物はなんでしょう？」

「最高裁判所！」

「じゃ、右のはなんだ？」

「えっと、国会図書館！」

「よーし、じゃずっと向こうに見える赤っぽい高いビルは？」

「Gメンに出てくる東京海上のビルー！」

と繰り返された。すりこみなのだろうか、今でもその辺りを通ると無意識にそれらの建物を探してしまう自分がオソロシイ。

さて、見学地到着。例によって先頭をきって車を降り、誰よりも先にカメラを構え、誰よりも多くフィルムを消費する。集合時には、どこから持ってきたのか建築物のカケラとおぼしき物体を手にホクホク顔で戻ってくる。高い場所があれば必ず登り、「いやー、絶景、絶景。いい写真が撮れた。え、キミ、あそこ見なかったの？」などと人を口惜しがらせては喜んでいる。

そして旅の一番のお楽しみといえば食べる。家にいる時だって「あ

とウン万回しかない食事、1食たりとてまずいものは食べたくない」とのたまう父である。ふつう、団体旅行では決められたレストランで全員揃ってお仕着せのメニューを食べるのが常なのに、父主催の旅では夕食はたいがいフリー。もちろん、父が出発前に名物や評判のレストランを押さえてあるのはいうまでもない。時折、どうやってお店を選んでいいのか、だいたいメニューの選び方も分からないし、と言って泣きつく同行者もいるけれど、

「そんなもん、街ウロウロして賑わっているところがあつたら入って、まわりのテーブルで旨そうなものを見かけたら指差せばよろしい。やってれば絶対楽しいから」

とハッパをかけて街に放り出してしまふ。それが成功して、

「いやー、やれば出来るもんですね。なんていう料理か知らんけど、あれ旨かったなあ」

などと興奮とともに報告されると、目じりを下げて我がことのように喜んでいたっけ。

名物料理が気に入れば、家でも挑戦できるように調味料や食材を買って帰る。そうそう、お土産にはカセットテープやCDも忘れずに。イスラム圏ならミナレットから聞こえてくるアザーンの朗誦、パリに行けばクチャ、リオであればもちろんサンバ。できれば露店で売っているような安っぽいもののほうが味があっていい。あとは鞆がはちきれそうなくらい、本を山ほど。家に戻ってもしばらく旅の熱は冷めないのだ。

子供のように好奇心を抱いては走り、未知のものとの出会いを心の底から楽しみ、その国にとっぷり浸りきる。そんなスタイルで父は疾走するように旅をして、人生も同じように駆け抜けた。

久々に父の手帖を開く。最後の1冊には、旅の記録の中に病室の実測図やその窓から見えたスケッチが交じってくる。あの闘病生活も父にとっては旅だったのであろうか。

父の旅の記憶と興奮、そして想いがギュッとつままったこの手帖。薄紙を綴じてあってふわりと軽いはずなのに、今はずしりと重い。





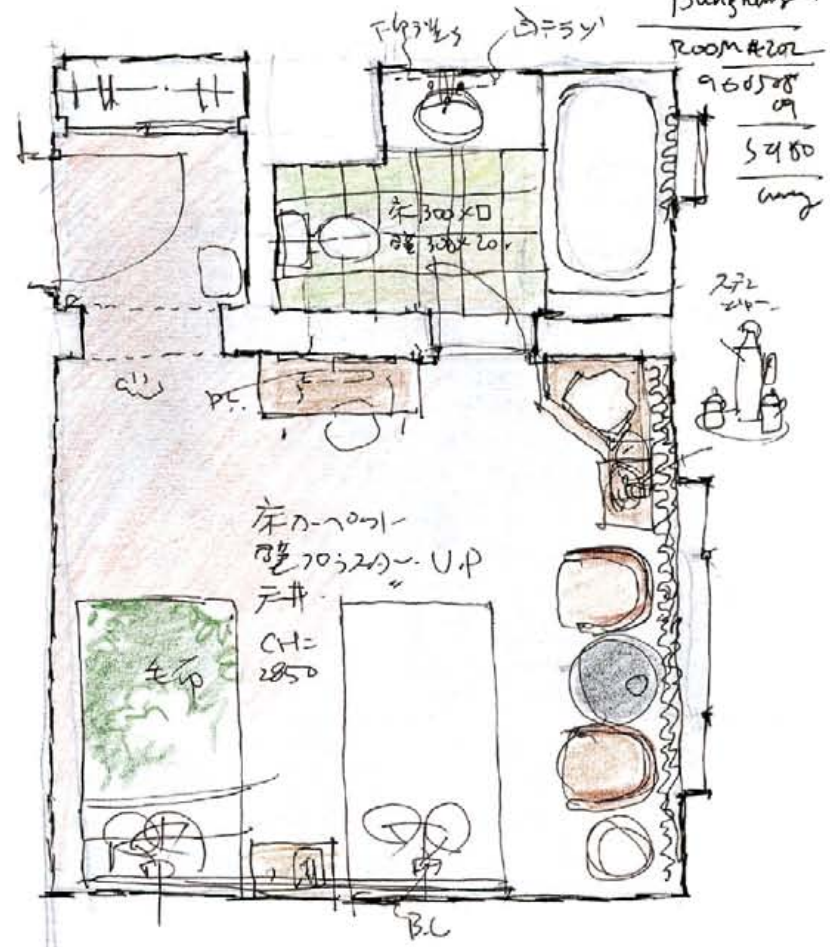
日本のほとんどの都市や街がそうであるように、古い秩序や歴史的なストラクチュアをまったく無視して新しい建設が行なわれているとすれば、そこがどれだけ歴史的に古い街であっても、歴史的街並みということとはできない。歴史的街並みとは、時代の要請に基づく建設が、いつも古いストラクチュアを踏まえて行なわれる、そんな街をいうのだということを忘れないようにしたい。

宮脇檀『宮脇檀の「いい家」の本』PHP研究所、2004年、347頁



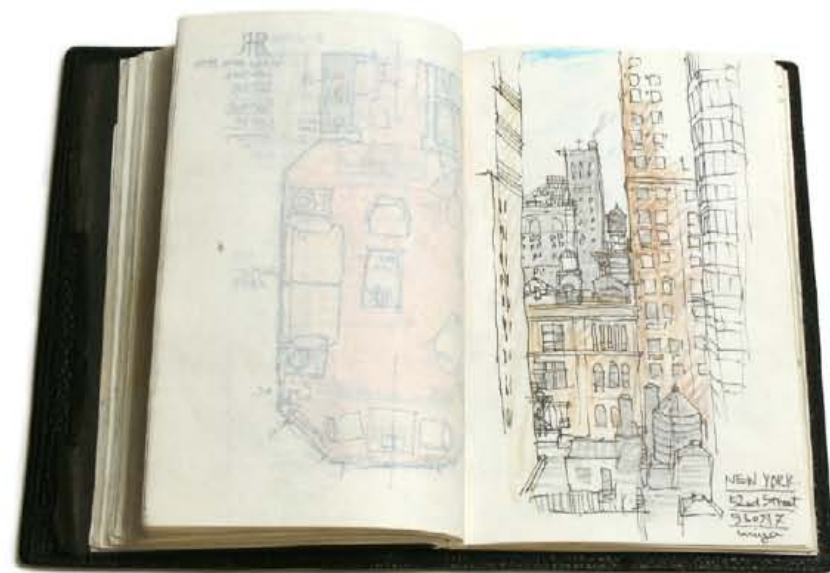


敦煌賓館  
DUNHUANG HOTEL  
No. 1. East Street  
Jungheung



本館全二階地  
地 釘 V.C. 白  
3/10/10





旅の手帖。持ち歩きやすいように薄い  
オニオンスキン紙製のものを好んだ。  
197頁まで、撮影＝畑拓（彰国社）



世界中から集めてきた旅のかけらたち。どこからどうやって持ってきたのかは、父しか知らない